

三重の風土と文学

— 展示資料目録 —

平成25年10月29日(火)～11月26日(火)



主催：三重大学附属図書館
協力：公益財団法人 石水博物館

協力：公益財団法人 石水博物館

江戸時代に活躍した伊勢商人川喜田家の旧蔵資料を中心とする。16代当主であり、陶芸家としても知られる川喜田半泥子(1878～1963)が昭和5年に成立した財団法人を母体とする。昭和50年に津市丸之内で登録博物館となり、平成22年に法人名を公益財団法人石水博物館に変更し、平成23年からは津市垂水(千歳山)に移転開館した。代々の当主が集めた茶道具、日本画、洋画、古典籍、錦絵、伊勢商人関係歴史資料のほか、半泥子の陶芸・書画で知られる。本年10月4日から11月24日まで石水博物館で、半泥子没後50年記念特別展「川喜田半泥子がみた名品」が開催(月曜休館)。

ごあいさつ

三重大学附属図書館は、三重大学所蔵の貴重資料のうち、三重に関係するものを選び、石水博物館からお借りした貴重資料と合わせて、企画展示「三重の風土と文学」として、公開することにいたしました。三重は、東海道や伊勢街道、熊野街道、大和街道など様々な街道が通っており、歴史と伝統のある文化の豊かな土地として知られています。本居宣長や松尾芭蕉はよく知られていますが、それ以外でも優れた文人・学者・歌人・俳人を生みました。本展示が多くの人にとって、三重の土地が地誌や文学作品にどのように描かれてきたのか、どのような偉人がいるのかを知る機会になると思います。今年ちょうど二十年に一度の式年遷宮の年にもあたります。伊勢神宮の参詣および遷宮に関する資料を紹介しております。古典籍からも伊勢神宮の歴史と威厳を感じていただければ幸いです。

今回の展示会では、先述のとおり、石水博物館の出品ご協力を得ております。また、展示の準備にあたって、本図書館研究開発室協力大学教員の人文学部吉丸雄哉准教授をはじめ、関係者の方々から多大なる協力を仰ぎました。厚く御礼申し上げます。

平成25年10月 三重大学附属図書館長 吉岡 基

展示資料一覧

三重の風土と文学

1. 国郡全図（三重大、291. 038. A51）
2. 伊勢参宮名所図会（三重大、092. 7. Sh92）
3. 流転数回／阿古義物語前編（個人蔵）
4. 伊賀越物語（三重大、092. 6. I22）
5. 勢陽風雅（三重大、099. 1. Se93）
6. 亀山賦（三重大、090. 98. Ka36）

伊勢神宮の遷宮と参詣

7. 伊勢参宮按内記（三重大、090. 98. I69（一般書庫））
8. 伊勢参宮細見大全（三重大、175. 88. I69）
9. おかげまいり／明和神異記（三重大、175. 88. 098）
10. 遷宮物語（個人蔵）
11. 伊勢二宮さき竹の弁（三重大、175. 8. Mo88）
12. 神都名勝誌（三重大、092. 91. J52. 1-6）

津の偉人

津坂東陽（つさかとうよう）

13. 夜航詩話（三重大、A919. 5. Ts91 集部詩文評類 [附]）
14. 夜航余話（三重大、A919. 5. Ts91 集部詩文評類 [附]）
15. 訳準笑話（三重大、924. 1）
16. 聿脩録（三重大、090. 91. To18（一般書庫））

齋藤拙堂（さいとうせつどう）

17. 拙堂文話（三重大、919. 5. Sa25 集部詩文評類 [A]）
18. 拙堂文集（三重大、924. 53. 1）
19. 月瀬記勝（三重大、099. 1. Sa25）

谷川士清（たにがわことすが）

谷川清逸（たにがわすがはや）

20. 整版本 和訓栞（三重大、813. 1 Ta88A1-20）
21. 谷川士清自筆本 和訓栞（石水博物館）
22. 谷川清逸筆写本 和訓栞（石水博物館）
23. 著作堂旧作略自評摘要（石水博物館）

三重の風土と文学

三重は古来より伊勢神宮へつながる街道沿いに発展していました。三重の土地がどのように地図や地誌で紹介されたのか、また文学作品の舞台としてどのように描かれていたのかを紹介します。

1. 国郡全図 こくぐんぜんず

地誌、刊、大本、2巻2冊、青生東谿(あおう-とうけい)著、秦鼎序(文政11(1828))・内田観斎序・菅原長親序(享和3(1803))・自序、文政11刊か、291. 038. A51(下巻欠)。

国を単位として一図に表した国絵図。地形は絵図的で実測とずれがあるが、わかりやすく重宝された。初版は文政11年刊本、天保8年(1837)刊本も現存多数。作者青生東谿は本名市川東谿という大曾根(名古屋市東区)坂上の薬種商で天保9(1838)に74歳で没した。(武内加奈)



2. 伊勢参宮名所図会 いせさんぐうめいしよずえ

地誌、刊、大本、6巻8冊、蔀関月(しとみ-かんげつ)編画、二緑園主人(藤波季忠卿)序、寛政9(1797)刊、(京都)菱屋孫兵衛・(大坂)吉文字屋市左衛門ほか5軒、092. 7. Sh92。

実景写生の挿絵を多く含み、地名・名所・寺社の由来や伝説まで収録した事典的地誌。三重大学の近辺で、ゆかりのある土地である「江戸橋」の丁には、伊勢街道に置かれた常夜灯が今と変わらぬ姿で描かれる。内宮では遷宮の様子を描く。(武内)



3. 流転数回／阿古義物語前編 くてんすうかい／あこぎものがたりぜんぺん

読本、刊、半紙本、4巻5冊、式亭三馬著、歌川豊国・国貞画、自序、文化7(1826)刊、(江戸)鶴屋喜右衛門・(江戸)鶴屋金助、個人蔵。

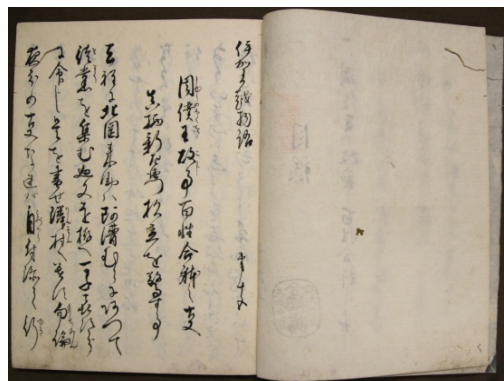
文化7年に前編が刊行され、三馬の没後、為永春水が後編を書き継いだ。当時の津の名所阿漕浦と阿漕平二の伝説にもとづいた稗史小説。展示の右ページは木版5枚をつかい西洋の銅版画に見せかける。またアルファベットのような字はくずし字を横にしたもの。(武内)



4. 伊賀越物語 いがごえものがたり

実録、写、半紙本、20巻10冊、著者不明、序なし、成立不明、092. 6. 122。楽山文庫旧蔵本(郷土史家鈴木敏雄旧蔵本)。

同題の写本は、三康図書館と伊賀忍者博物館にあるのみ。題名から想像される荒木又右衛門の伊賀越敵討実録ではなく、寛政8年末(1796)に津藩で起こった大規模一揆を基にした実録。阿漕平二の子孫北岡来助が一揆を起こす。巻14には兜を狙うしのびが登場する。(武内)



5. 勢陽風雅 せいようふうが

漢詩、刊、大本、2巻2冊、雪巖(せつがん)著、芥川丹丘序・自序、跋あり、宝暦8(1758)、(京都)伏見屋藤右衛門・(京都)伏見屋藤次郎・(津府)山形屋傳右衛門、099. 1. Se93。

三重の文人150余人から漢詩を集めた地方撰集。宝暦8年歳旦歳暮の詩200余編、また付録として文人僧雪巖が遊歴中唱和した京・大坂などの詩友48人の66編が収められている。(武内)



6. 亀山賦 かめやまふ

随筆、写、半紙本、1冊、栢樹堂友心著、享保ごろ成立か、090. 98. Ka36、楽山文庫旧蔵本。

『国書総目録』に記載のない孤本。筆者は「乙卯某日 亀山散人 栢樹堂友心」とあるのみで他は未詳。奥書に「世是等人」という下宿人が「延享改元春日」(1744)に写したとあり、よって一番近い乙卯の享保20(1735)が成立年と推測される。日本武尊の伝説とその墓陵、鈴鹿亀山の寺社などを記す。(武内)



伊勢神宮の遷宮と参詣

伊勢神宮は古くより崇拜され、貴人から庶民まで多くの人たちが参詣しました。数々の案内記が実際にガイドブックとして使用されました。今年には20年に一度の式年遷宮の年にあたっています。遷宮に関しても、多くの記録が残っています。伊勢神宮関係の資料をご覧ください。

7. 伊勢参宮案内記 いせさんぐうあんないき

地誌、刊、半紙本、2巻2冊、講古堂主人著、自序、宝永4(1707)刊、(伊勢)藤原長兵衛・(京都)今井喜兵衛板、090.98 169。

楽山文庫本。著者は版元の藤原長兵衛。伊勢参宮案内本の嚆矢。巻一では外宮、巻二では内宮を中心に、街道に沿って神宮周辺の地理を記述。(三輪京平)



8. 伊勢参宮細見大全 いせさんぐうさいけんたいぜん

地誌、刊、横本、1冊、芙蓉山人著、自序(宝暦13(1763))、明和3(1766)刊、(京都)秋田屋平左衛門・(京都)梅村三郎兵衛・他六軒板。175.88 169。

伊勢神宮の参拝者を対象とした観光案内書。参宮のための用意、吉日、凶日にはじまり、船賃などの経費、各地から神宮への行程を詳細に記す。横本は、着物のたもとに入れやすく、携行に便利な書型。(三輪)



9. おかげまいり／明和神異記 おかげまいり／めいわしんいき

神祇、刊、半紙本、1冊、明和8(1771)刊、(京都)菊屋喜兵衛板、175.88 038。著者名不詳。序跋なし。

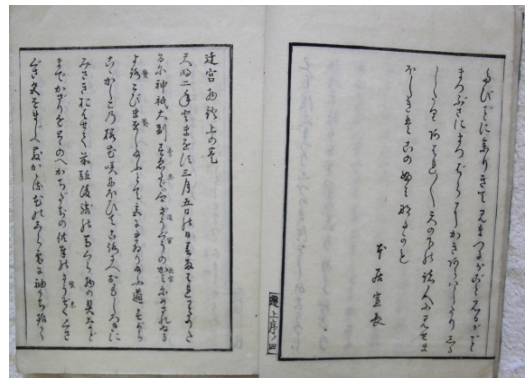
明和8年におきたお蔭参りの経緯を報じた本。お蔭参りは約60周年期で流行し、明和8年のほか、宝永2年(1705)・文政13年(1830)に発生した。明和8年4月8日から8月19日までの参宮者数を441万9000余人とする。当時の人口は3100万人ほどであり、その熱狂がうかがえる。(三輪)



10. 遷宮物語 せんぐうものがたり

神社、刊、大本、3巻3冊、荒木田末偶著、本居宣長序、他無記名序、自跋（寛政2(1790)）、寛政2刊、永楽屋東四郎板、個人蔵。

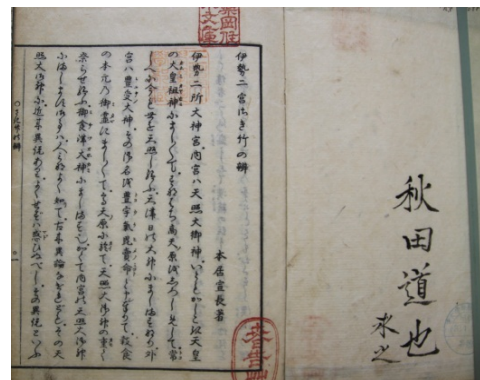
内宮権禰宜である荒木田末偶が、寛政元年(1789)9月に行われた式年遷宮について記した見聞録。当時の遷宮の様子を知る資料である。(三輪)



11. 伊勢二宮さき竹の弁 いせにくうさきたけのべん

神道、刊、大本、1冊、本居宣長著、寛政10(1798)刊、(江戸)須原屋茂兵衛・(勢州松阪)柏屋兵助・他六軒板、175.8088。鈴屋蔵板。外題「さき竹の弁」。序跋なし。

伊勢二宮の神について論じた。外宮の祭神への論考が、外宮の軽視と受け取られ、反論書が多く出た。蔵書印「神楽岡住高木文庫」「春告草」。(三輪)



12. 神都名勝誌 しんとめいしょうし

地誌、刊、大本、6巻7冊、東吉貞編、松岡康毅序、日向良俊序書、自跋、明治28(1895)刊、(東京)吉川半七・(大阪)松村九兵衛・(伊勢津)河島九右衛門・他六軒板、092.91 J52。

神宮司庁の禰宜らが編纂した。凡例に伊勢神宮を参詣する人々に向けて、神宮の霊区を歴覧させるために編集された、とあるように、神宮周辺の地理を記した地誌。2『伊勢参宮名所図会』と同じく五目綴じ。(三輪)



津の偉人

三重は文学史上の偉人を多く輩出しています。伊賀の松尾芭蕉、松阪の本居宣長の名前を知らない人はいないでしょう。芭蕉や宣長以外でも、優れた実績を残した人物が現在三重大学のあるかつての津藩にいました。地元のなかの地元の偉人として、緻密で浩瀚な国語辞書を残した市井の学者谷川士清、藩校有造館の教育者としてまた文人として優れた著述を残した津坂東陽と斎藤拙堂に関する貴重資料を紹介します。

津坂東陽 つさかとうよう

儒学者。宝暦7年(1757)生、文政8年(1825)没。名は孝綽(こうしゃく)。字は君裕。元は医学を志し18歳から儒の道へ。23歳で京に出て、ほぼ独学で学問を修める。33歳で津藩の儒官となり、以後伊賀で教授にあたる。10歳で、10代藩主藤堂高兌(たかさわ)に登用される。藩校有造館設立の建議をし、63歳で有造館の初代督学となった。東陽の文事は量が多く、多岐に渡る。歴史書・郷土史書、藩校教科書、裁判案文集、教育書類のほか詩学書を多く残した。

13. 夜航詩話 やこうしわ

漢詩文、刊、半紙本、6巻6冊、津坂東陽著、斎藤拙堂序(天保3(1832))・自序(文化13(1816))、明治刊、三重県蔵版、A919.5.Ts91 集部詩文評類〔附〕(巻5・6欠)。

初版は天保7(1836)刊の津藩有造館版。三重大本は明治期の再版本。これは明治期もよく読まれたあかし。漢文体で思いつくまま、漢詩をさまざまな視点から自由に論じた詩の評論集。序文の「夜航の群坐、偶語紛紛たるごときのみ」(夜行の乗合船でのとりとめない会話のよう)が題名の由来。

『日本詩話叢書』2に翻刻。(吉丸雄哉)



14. 夜航余話 やこうよわ

漢詩文、刊、半紙本、2巻2冊、津坂東陽著、自序、明治頃刊、(津)木村光綱板、A919.5.Ts91 集部詩文評類 [附]。初版は天保7(1836)刊、津藩有造館版で三重大本は再版本。

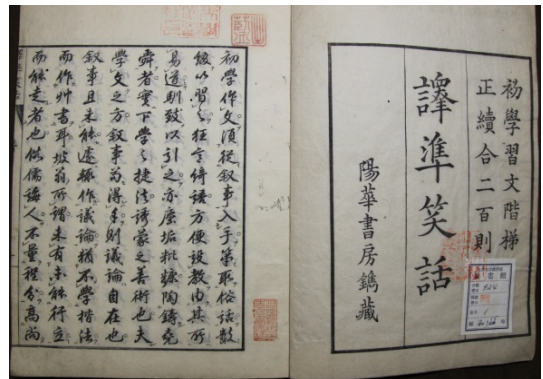
『夜航詩話』の漢文体と違い、『夜航余話』は和文体。上巻がかたかなまじり文、下巻がひらがなまじり文。下巻に漢詩と和歌・俳諧の詩趣を比較するのが面白い。岩波新日本古典文学大系65『日本詩史五山堂詩話』(揖斐高校注。開架918sh64 65)に収録。(吉丸)



15. 訳準笑話 やくじゅんしょうわ

漢文、刊、大本、1冊、津坂東陽著、匏庵癡叟序(文政1(1818))、文政7(1824)刊、(京都)鉛屋安兵衛・(同)植村藤右衛門・(大坂)柏原屋清右衛門・(伊勢津)山形屋伝右衛門板、924.1。

半紙本で山形屋伝右衛門のみを版元とする文政九年版(参考出展本、個人蔵)と、同じく半紙本で(尾張)梶田勘助を版元とする文政九年版がある。匏庵癡叟は東陽の別号であり、著者名は明記しないが、東陽の著述であろう。漢文体の笑話集という珍しい内容で、「初学文ヲ習フ者ノ為ニ聊カ訳準ノ資ニ充ツル」(序文)とあり、漢文学習のため編まれた。(吉丸)



16. 聿脩録 いっしゅうろく

刊、伝記、藤堂高兌(たかさわ)撰、2巻2冊、徳川斉修序・自序(文政1(1818))・林衡序(文政12(1829))、津坂東陽跋(文政2(1819))、文政12年(1829)序、津藩有造館版、090.91.To18。

津藩主藤堂家の始祖、藤堂高虎の伝記。津坂東陽の『太祖創業伝』を増補して、藩主高兌の名で出版した。表紙に藤堂家の家紋薦紋の型押。翻刻に『補註国訳聿脩録』(昭和5。書庫090.91 To18)。(吉丸)





儒学者。寛政9年(1797)生、慶応元年(1865)没。諱は正謙、字は有終。江戸の津藩邸生。幕府の教学機関の昌平黌で古賀精里に学ぶ。24歳で津に移り、以後津藩のために生涯尽力する。藩校有造館の三代目督学(校長)として文武の両面において、育英につとめた。また藩校の蔵書の充実につとめたほか、『資治通鑑』など、藩による出版事業に力を注いだ。有造館では藩士に洋学・兵法・砲術など実学も積極的に学ばせた。安政2年(1855)に幕府に招かれたが固辞して津藩で生涯を終えた。漢詩・漢文にも長じていた。

17. 拙堂文話 せつどうぶんわ

刊、漢詩文、齋藤拙堂著、文話8巻4冊、頼山陽序・古賀焜序・自序(文政13)、文政13年(1830)刊、(大坂)河内屋茂兵衛、他10軒板。919. 5. Sa25 集部詩文評類[A]。

漢文の歴史と変遷、作法や古来の文体の考察を記し、その模範を記した。江戸時代に出版された漢文論のうち、質量ともに最大級のもの。続編に『続文話』がある。(吉丸)



18. 拙堂文集 せつどうぶんしゅう

刊、漢詩文、齋藤拙堂著、中内惇編、6冊、中内惇序(明治14)、長谷川圓祁跋(明治14)、明治14(1881)刊、(三重)齋藤次郎版、924. 53. 1。

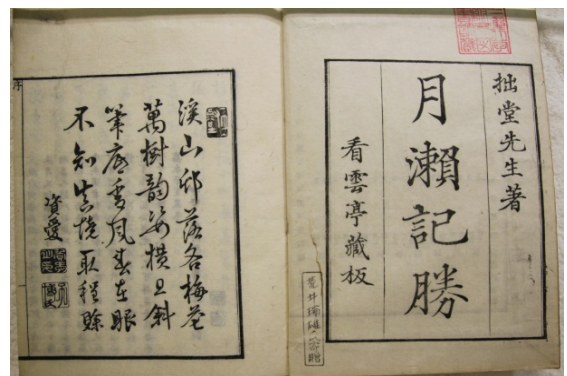
拙堂の門人中内惇が、序跋や墓誌や伝記といった拙堂の記した文章を広く集めたもの。明治の「文集」ブームの模範となった。(吉丸)



19. 月瀬記勝 つきがせきしょう

刊、漢文地誌、齋藤拙堂著、嘉永4年(1851)序、2巻2冊、香雲亭藏版、A919. 5. Sa25。

名張川の溪谷にある梅林の名所の月ヶ瀬にまつわる詩文集。上巻は文政13年(1830)に拙堂が梁川星巖夫妻らと月瀬を訪れた体験にもとづく紀行詩文。下巻は星巖夫妻や頼山陽らの観梅の詩集。初版は有造館蔵版、嘉永4年刊本。展示本は(伊賀)豊住伊兵衛・(津)篠田伊十郎を版元とする明治14年(1881)刊本。その他の異版も散見し、長く愛好されたことがうかがえる。(吉丸)





谷川士清 たにがわことすが

宝永6年(1709)生、安永5年(1776)没。伊勢国安濃郡八町(現在の三重県津市八町)の代々医者をして業とする家に生まれる。字は公介、昇卯、卯齋、号は淡齋または養順。

21歳の頃、京都で医学を学ぶとともに、松岡玄達に本草学・漢学を、松岡仲良や玉木正英に垂加神道を学んだ。26歳頃帰郷し、医業の傍ら洞津谷川塾を開き、多くの学者と積極的に交流して研鑽を積んだ。

特に『日本書紀』の研究に熱心で、宝暦元年(1751)に注釈書『日本書紀通証』を脱稿している。この書の執筆が、その後の大著『和訓栞』の編纂にもつながっている。

晩年には、松阪の本居宣長(享保15年(1730)～享和元年(1801))と幾度も書簡の遣り取りをし、『和訓栞』について意見を求めることもあった。しかし、士清は刊行を待たず世を去り、その後の刊行作業は子孫や門人らによって行われた。



谷川清逸 たにがわすがはや

生没年不明。谷川士清の曾孫に当たる。

20. 整版本 和訓栞 わくんのしおり

辞書、刊、大本、前編45巻34冊・中編30巻30冊・後編18巻18冊、谷川士清編、前編本居宣長序・谷川士行跋(文政11)・後編野村秋足序(明治20)、前編 安永6(1777)・文化2(1805)・文政13(1830)・中編 文久2(1862)・後編 明治20(1887)刊、前編 (東都)須原屋茂兵衛(京師)山本平左衛門・風月荘左衛門 他1軒・中編 (東都)須原屋茂兵衛・岡田屋嘉七(洞津)篠田伊十郎・秋田太右衛門(大坂)河内屋喜兵衛・敦賀屋九兵衛 他7軒(岐阜)三浦源助・後編(岐阜)三浦源助、三重大学蔵(813.1 Ta88A1-20)。

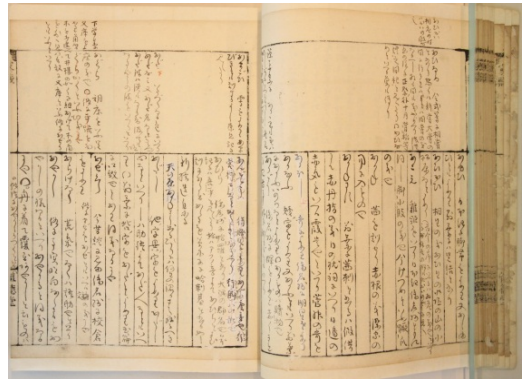


本書は、津の国学者・谷川士清によって編纂された大部な国語辞書である。士清は刊行の前年に亡くなっており、士清の死後は子孫や門人らによって刊行作業が行われ、110年かけて前・中・後編の3編が刊行された。大部なものであったため、一度で刊行することは難しく、内容を一部節略し、五度にわたって刊行したのである。採録語の範囲は、文学や辞書類の語彙にとどまらず、方言や外来語、有職故実や鳥獸、草木などの事柄に関するものも多い。見出し語には多種多様な典拠を挙げ語釈を加えている。登載語数はおよそ二万語。五十音引きを用いており、近世の辞書としては最も整った内容を有していると言える。なお、本学所蔵本は前編「は」(24巻)から前編「わ」(45巻)を欠く。(前田由香)

21. 谷川士清自筆本 和訓栞 わくんのしおり

辞書、写、大本、7冊、谷川士清編、成立時期不明、石水博物館蔵。

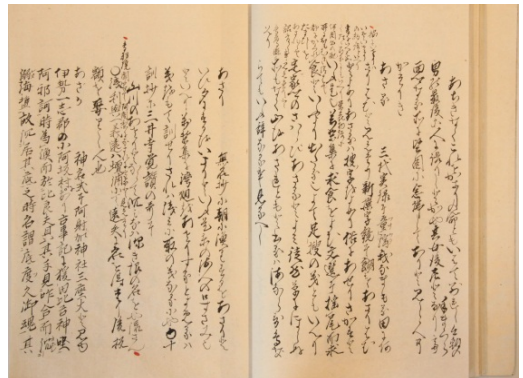
谷川士清による20『和訓栞』の自筆稿本である。遊紙に「若樹文庫」の印あり。本書は、千歳文庫主である川喜田半泥子氏が林若樹氏から大正11年に譲り受けたもの。収載語数は20『和訓栞』整版本より明らかに少なく、また、本文の体裁から比較的初期のものであることが窺える。宝暦7年(1757)以後から宝暦二桁以前の成立と考えられる。三重県重要指定文化財。(前田)



22. 谷川清逸筆写本 和訓栞 わくんのしおり

辞書、写、大本、40冊、谷川清逸写、石水博物館蔵。

21『和訓栞』自筆稿本と実際に出版された20『和訓栞』整版本の間に位置する本である。士清の学友・河北景楨による写本を、士清の曾孫に当たる清逸が天保10年(1839)弥生の末に書き改めたもの。『和訓栞』は刊行するために、下原稿の段階から内容の節略を余儀なくされた。



本書は20・21本よりはるかに見出し語数が多く、その節略以前の状態を残している。また、本文には朱筆による書き入れがあり、これには誤りを正すものの他に整版本刊行を想定して体裁を整えるために書かれたと考えられるものがある。本書は、『和訓栞』の成立過程を明らかにするために欠くことのできない重要な稿本である。(前田)

23. 著作堂旧作略自評摘要

ちよさくどうきゆうさくりやくじひょうてきょう

写、半紙本、1冊、曲亭馬琴著、石水博物館蔵。

馬琴は目が見えなくなった晩年、自作読本の評価を息子の嫁のお路に書き留めさせていた。お路の書き留めを馬琴の知友である松坂の小津桂窓が写したのが展示本。文化期に執筆した十八作品の評価が記され、馬琴の文学観を知るたいへん貴重な資料である。神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評』（汲古書院、平成25・3、開架913.56 B15）に解題、影印、翻刻が収録された。（吉丸）



あとがき

本展示の選定および解説・解題執筆につき、大学院人文社会系研究科 修了生前田由香氏、人文学部文化学科学生武内加奈氏・三輪京平氏の協力を得ました。また石水博物館飯田俊司氏・龍泉寺由佳氏には多大なご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

三重大学附属図書館研究開発室協力大学教員
人文学部准教授 吉丸 雄哉



三重の風土と文学 展示資料目録

発行 三重大学附属図書館

平成25年10月29日

この目録はインターネットからでもご覧になれます。
URL http://www.lib.mie-u.ac.jp/r_and_d/research/exhibit/mfb.pdf